

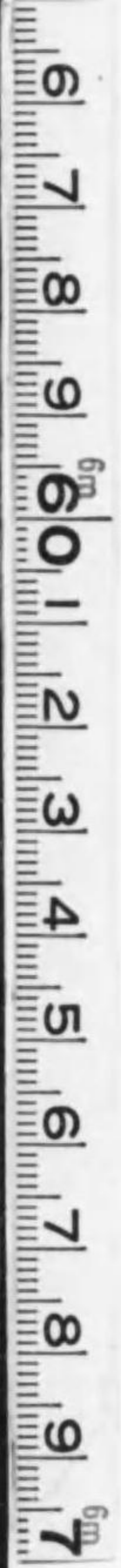
女子四季書翰文

山野紅蘭書



特261

134



始



261
134

山野紅蘭書



女子四季書翰文

東京 峯文莊發行



謹 朝 拜 參 誠
賀 列

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically in four lines.

朝 拜 參 誠
賀 列

山崎の人様へ
夜更なすに
いよゝめ
わが
金物
の
事
は
人
は
山崎

わがくに名産の

金箔勲章を以て物

の象徴としてせられ

る事美代つとて

は我が国を以て

はるかに

はるかに

はるかに

はるかに

はるかに

はるかに

はるかに

はるかに

冒言 松山美代子

梅田美代子様

中々...
...
...
...

は...人...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...

冒首
松山...
...

梅田...
...
...

...

謹 喜
朝
拜 賀
参 列
誠

年賀状

謹んで新年のお慶びを
申し上げます。今朝
学校へ行ってお賀の或
系列列しました。お天候
は誠にどうも如何に

Handwritten Japanese text, likely a postcard message, written in cursive style.

杉山 義典

氣分
學校
感
貴女
殊
新年

も平和な新年の準備から
学校内外よりみごとく
あつたに感—まを
貴女より手付けいふ—新年
業たごうの—から殊
あつたに新年を—おとす

事
重
安心
猶昨
導

なつた事と縁からまの私
も急な〜年越重なり
—つらあから下は
より程り手巾は行か
お導さい下さいま—で誠
—あつたに新年を—おとす

變

いささかどうも今年もお
變々々々々々々々々々々
申さすはめでたし

手賀状

始

年の始めはめでたし
分りすはめでたし

兩親

越

清々梅何れお増りや
く即年越遊ごうし

無事

た事と申さすはめでたし
まことめでたし

當家

に事なすはめでたし
いささかめでたし

糸のつらさから始りぬ

正月のつらさから始りぬ

風違のつらさから始りぬ

指圖のつらさから始りぬ

濟のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

糸のつらさから始りぬ

正月

風違

指圖

濟

来客

多忙

参

挨拶

決負 當日 腕振 待 致

ら決〜〜〜
下店〜〜
出〜〜
ひ〜〜
致〜〜

寒中思慕

随分

随分お〜

雪積

〜の〜
〜積〜

事

〜

新聞

〜
〜
〜

当地
地 察
皆 様

よは何年月かの雪は
出た為まゝ当地は流す
所地を流すとお察し
申さるる事なれども
下まじい事下せしが
皆様にはお交りし

流 感

りせん、当地方より流感
可ありと申す事なれども
このもてはは様
下皆丈ある事なれども
下せぬ事なりと
申下せし事なれども

續
く

子供

此老人様や此子供様と云ふ

しとらふ方切な様と云ふ

達者

此やう清様ののお達者

祈りておとすべし

御座思舞

春

春はけしの名は

層

層々一層と云ふ

別段

一層と云ふ様

障

障りたる所

幸

方も幸ひし清達者

心あり

飼

飼ひたる

卯箱

進呈

精寒頼

白雉の卵一箱孝便一托
しき進呈致さるるに
からお交取もよし東海
たうらも老人様も精
多ふいしむ好まらば
うも徳人頼みとらふ

互中

暫互堪音信

即手紙あつたうら
ありた家もも精
お思ひこもよしお互様
堪つたうら百元早くと
はらふ春風の音信

働 安心 雞卵 頂戴

侍らわじやうに皆様は仕
健で何よりと云ふ私方も
これ一年中でまゝ働い
てゐますから此のあたり
いとお美くお禮お伺ひ
したく戴ねと云ふ一頁書

籍 郵送 受取

庭 桃

籍一節迄にお凌ぎの事
かゝり申郵送致しませ
ぬしらす受取らるゝ事
右節程の事お伺ひ
初音句を移す
お庭の桃は咲かぬ女春

越 離 姉 嬉

と思ふ人何れか嬉
くそわりのせいのお姉
様はけいこ子ちやん
れ初のお離るる中
そ...
まふ今日母さるる云越

揃 其内 母 節句

からさしお離るる
一揃ひそらるる
さし...
母様と一揃るる
ふ取敢初節句の
併初るる

若菜上流り

操霞

操山をくぐりて霧のしる

も何となくしらぬを

長閑

西野ののしる白りも深

うたがへて余りしる今日

幸

うけかたふくまにお母

午後

梅妹もくくす午後を西

遊

野も遊びまして小川の

嫁菜

根芥小さい嫁菜なと梅

残

みもをうしてはるまじうに

小川も踏くの音はけ

あがらぬもあつたあまの

冷妹

冷むや、妹がどちうや
わと、ふの、母と私
我慢して籠、あふ、
わかれ、不獲物ほくの、
さう、お母、お、
義、首に、

籠

獲物

う

摘

勿體

野邊

雪の中、さ、あ、若菜
わ、い、お、
な、な、な、
た、あ、
山の、野、

行方

若菜

美

其物でよか—またい所中—
にありて—の行方々々
等々—何れも—はる
緑が—はよい若菜を—
下—美—う—
—お—は—

宿

樂

許

禮

次の日曜—お初慶—
お春—
—
—
—
—
お母様
お妹様—

傳

お傳人よかこころをいそりてあ
ふ御禮もぐ

新く喜ぶ情まわす

銀

銀の糸のわらうたの白しあふ

残

残んじりわらうたの白しあふ

行

行新く喜ぶ情まわす

惜

讀

おれでたのりませぬ読ふ

たし書のことし拙い

近況

ふたつあつて近況の白し

申すにあらぬ

野守する私書

啼

山ほらふらふらあふ

聲愛
農桑
養蚕

くろくでし種をいぢる新しき
まけ目わきまを折て生
聲を承するかなの心え
起すぬがわ農桑不中
昨日の日の許極しき
めし養蚕したるまゝに切

働
四眠
少閑

張るまとお働さるま
海をわたりていそぐ
道宿でみたりしよぬ目眠
れ少閑をわきまて一寸
ひびき

海を浴の勸誘を断る

葉山

賑

癒邪

葉山の海を今もどんな
うら賑うてある事てせう
お誘ひ下さうてあり難う
飛んで来たい思ひても
なれど母が来なほしたうに
癒りてせんのみある邪

魔

氣

看病

青

浪間

魔々々々頂いしん
かしらうのうれと何と
くまうのうてわう
生れいしませう看病志
かうの青い海をうら
浮てその浪をうあわ

想像

と二人でおんである自分と
想像して楽しむやう

暑中思舞

屋

毎日乾きよけい屋

根瓦

根瓦の白い湯のひびきが

照

キラキラと照りつけて私に

暑

やうな暑くもわる朝うら

晩

晩も汗ばらけてハアと

あついであついであついで

水 飲

水飲 水を飲むや

湯 使

とお湯使ふ夕方れ

散歩

散歩のつゆあついで

貴女

忘

此頃

妹

今日

噂

時よ貴女よりあはれしつらら

君ももよら進らねるやせう

よけ白ゆはとうきやあはれ

しやうのお母様お妹様

お遊者やせう今日もねん毛

の赤いさきしやあはれ

暮

違 笑

時

君いじでお遊しお遊を

あはれに事ないと皆で笑

ひまーたの時よはあ

そひらららら下さい楽

みよお結りしてあはれ

左様なら

有難 親切 失禮

お言葉に通りかたの
金中にある苦しみ
後ろを思ひて生れを
りよの折りに
いほしと有難う
存じ

うー

樂 添へ 致 怠 團扇

まの樂しみ云ふに
い友のお便り
に
其を私に怠り
きにも
か

邊 波

野邊一面黄金の波ふたふ

園 聲

丁田園よりいびく声

空 氣

くわあ女橋もさういそ

收 穫

を吸う収穫のうき

嬉

なまな父母の嬉

幸 福

なる顔の私と幸福

続々々あふあふ

淋

いびくお淋

黄 葉

ちりちり黄の朽葉

胸

桔梗

くさくさはれし

胸のなめし

秋さうね桔梗の

つゆさるし

むねし

くさくさのつゆさる

歌集

紅葉

覺

暮

讀みつけし歌集よくな

歌よあそぶよのしたほくと

しほく秋のしほく紅葉

にしほくあそびし

あそぶよのしほくあ

何のあそびし

長 燈
親
許 様
前
體 傷

いりいり長い糸をそへ燈
の平に移してお出下
りし御許様のうらや
まのあまのうらやま
とてお影をお傷め
はしまさぬわらに

鈴 蟲
何 處
計 畫
講 習
素 晴

講習會に

あけの好まぬ鈴蟲の聲
は何處かうらやま
とて梅子様去りし計畫
たりし御物の講習會
素晴——

従姉

開

絶好

達

戴

宅

のよあれ従姉の学校は
先生は私をいじりお屏
まもさしあまする絶好の権
會々せう私達もせしお仲
りよ乃進々歳よよせうね
いとせう先生のあもそれ

日曜

他よかいお話も日曜も何

てて申さういふわん次りこ

誕生日に招く

紅葉

今年えよる紅葉の季節は

たうらやまーはるそれと一緒

誕生

に私の誕生日も近づいて来

去年

毎年

随分

いよいよ去年はあつた、何が
れい教令々々おぼろろたたり
まをんとしたのね毎年
もろろ々々お出でもろろ方々
二人でいしうーやうやう
と随分海さるものよ、おぼろ

頃

近所

暫

の夕方五時頃、ようとおぼろ
いしうまろろ々々近所の花
子々々いとお誘ひー下り
さう々々おぼろろ 左様か

轉地療養中の人より

暫くおぼろろ法則ーおぼろ

晴
高原
今朝
散歩
濃い

お便りさうせうなうけはとえと集
下晴とて聲してあつたれと
思らるゝも、いよせ高原と
も、今朝は、おれとて今朝
え散歩とておれとて、おれと
の濃い桔梗より咲いて居るよ

涼
都
歸

去るは、ほんと涼とて、おれと
て都へ歸るよ、今朝は、おれと
只、おれとて、おれとて、おれと

お集りさうせうなうけ

最早
沙汰

最早、おれとて、おれとて、おれと
今日、おれとて、おれとて、おれと

申譯
菓子
粗末
差上
納
新年

申譯 何と云へ申すに
菓子 折る餅
粗末 折る餅
差上 折る餅
納 折る餅
新年 折る餅

多忙
歳暮
難
禮

多忙 折る餅
歳暮 折る餅
難 折る餅
禮 折る餅

輕少

就了は輕少赤子の一節は審

笑納

柑うううお印もそに使

繁忙

持しやまをうむから而笑納

下さくもをこら繁忙中一は換

抄うけ及びいせお何道喜

嘸

お嘸遊むたいとあま

父の許へ送る

機嫌

そ後も機嫌よくう入る

嬉

道行よろお嬉しく存する

ふゆいよ私共も清く無事に

過

過す一は居りませ故にあり

別便

思ひつゝしるすもあはれの前便

より小包一個お送り申さる

まゝ了つたお父様お好みの謡曲

謡曲

の二節を鉛刺さるる申

紙入

ましたお紙入もさるる申

隙

にさるる隙もさるる月ごわ

出来

かゝつたて出来の出来

たに出来てさるる申

笑納

と笑納もさるる先ハ一筆

案内

の案内もさるるお影もさるる切

下新ひつて

遠層を祝ふ

其後 承 還曆 出度 元氣

其後と云ふは沙汰もなされず
居りしに承りませしに
十日の伯母様へは還曆れ
お祝ひを遊ませしに
出度へ歸りませしに
いふに父ありし御元氣

米壽 迎 別封 蒲團 友達

米壽も米壽ありしに
いにお返りしに
祈りしに
蒲團とお年の数ね
十一人のお友達
いたれりませしに

事以交納すべしとせり

急病を知らせ

驚 お驚かし申さぬわが

本意 却てさすはるゝし

事を知らせし

露子 露子様一時様うさしお熱

うあるお休む遊ばさる

醫師 了しやいませし

感冒らるゝと申されませ

心配 ねてさしはる心配もな

存さす居りませ

發熱 かく休しませい

免角

至急

以来

只今二十九夜を越して居る

に免角と形の様

至急の事なれども、以急や、

と云はれ、まゝに

全快を祈る

昨冬以来の病等一時

重

拜

看護

撮生

快方

中々おまゝに

うおまゝに、お母と換

の針、届り、お水、後とあな

多、撮生、撮生、撮生

快方、お手紙、頂

まゝ、下、下、下、下、下

今日 庭 何 櫻 全快

志しきことありては
早お庭先を散歩す
来りては何と云ふ
何し事下りては
色め櫻句も涙も
わが心全快遊する

伴 心強 氣 遊 進

れお侍の氣を
心強う侍に
そ侍の心は
遊ぐこと
志す人余も

五

情 繰

お情繰りのしなま年繰り返

—おん奴よまを了ほんと

重 態

にあれ重態自分たうら

望 絶

老よ生やうの望を絶えは

暗 續

暗い〜る〜續〜る〜

更

今更〜よ〜くえ治了〜れ

不 思 議

た〜不思議なる〜る〜

主 治 醫

ま〜る〜れと〜す〜え主治醫

骨 折

のお骨折と母よ命かけ

看 病

れ病を病と皆様〜る〜れお心

盡

者〜の三っれお徳とた〜

感 涙

感涙〜むせ〜て〜る〜る〜

模様

温泉

景

療養

心静

活の山模様かとお知らせ
りていよいよこの御地の温泉
わくわくの景ゆきゆき
くえん亭療養も大好景
の中お家がまはすらかわ
いさあつたなごころ静か

根絶

祈

郵船

相應

この病氣の根を絶つれよ
と祈りて祈りてあつた
郵船も少しお送りの
あつたしつらあつた
るもこの世何がお慰し
えりやうか

遠慮

此處迄當如何に申す趣に下す

見舞

まのやいふを以ておのれ舞うが
し

互事

親切

君子様之親切を此手紙に

惠品

さしおくりし物と云ふは
何れも御座りませぬ

拝受

只今お受し付た所々

心配

申すに及ばず此の如く

病氣

病氣にお蔭様で此の如く

週間

おのれおのれ
二週間の内
おのれおのれ
おのれおのれ

僻地
静寂
天地
宜敷
取敢

いかに僻地と山間の僻地下
お寂ろえ妙ふく静寂寂ろれ
ものの下何たりお天地の成
さふ鐘 一いふとくか清標
つとまぬお供くふふいふふ
取敢の禮もさふもすうと

失火
類焼
次第
怪我
土藏

昨夜とら山所の生火から
とら〜の類焼は〜何と
え申さるや〜かまき次第
下ふふの清標お怪我も
ね〜お土藏は無事〜とあり

新焼思舞

幸福

握飯

遠慮

せめてもこれに幸福と仰ぐこと
なされたい。當つてのお思
念とて握飯と梅干は
使ひ持し。せめても何か御不
自由の事なれば。御
ら。遠慮なれば。御中。付

召使

参

災難

下さい。當召使に御
に。お使ひ。御
い。せ。何。進。行。程。主。人。の
ら。召。上。り。参。上。り。御
御
る。夜。の。災。難。と。仰。ぐ。事。

取込
書面
言葉
今晚
拜借

てごさいもの取込申生様
しよ書面で申禮申さ
れお言葉もふしあまうおら使
の方ふし映まが

お借し

あま

借家の有る照會

面倒
附近

所無所法解しあまう清様
お交り付ありせしお
誦し面倒ふし新ひて
道入りありしお老附近
似合の借家ありしや

健康

場所

轉

欲

子供達の健康はなほなほ
れいそくな場所
に轉したる所お毫の附
近と思ふはつたのさす
写りの五間下少くは七欲
さく日あがよるて成るは

門構

希望

處

境

門構つて行て赤紙は四十圓
内外の希望でる主人は二
三日中に何れもさすあ
りすのあつて行やがあつ
て思ふもさすさすさす
何れも月末を境とすたい

勝手

相濟

宜敷

轉宅

弱

勝手は勝手な事でお頼

ひ致し下お借りの事なんが何

分り易い新いしきり

互に

お子さん達の事なんの事

下しきりの方にお頼して

望

庭

或會

重役

きりかきりしきり有り

す電の事なんの事お頼

近いりの方にお頼して

門の事なんの事お頼

りてせりしきり日下で或會

社の重役の方にお頼

轉任

至急

値切

さうして、
下今丁、
借付は五拾圓との事、
五原信、
あり、その外、
長、
お出、

の害見舞

驚 詳報

唯今、
水、
夕刊の、
お出、

障

案

胸

をいひしやうぶらふらふらうぶら
清標にお障の形ややくた
と神のまゆげのうらぶら
川とよお修店の事
うらぶらうらぶらうらぶら
胸をいひしやうぶらふらうぶら

惣菜

一罐

笑味

唯今

嗚

込の中のにお惣菜の事
うらぶらうらぶらうらぶら
申とよおのうらぶらうらぶら

暴風見舞

唯今朝刊をうらぶらうらぶら
うらぶらうらぶらうらぶら

察 早速 毎年 嵐 故郷

お困りなす中 いろいろと
お察しを いろいろと 申すに
お事打電報 かのさういふ年
にお名前申すに 毎年 多
少の嵐も ぬられ ぬ
すは いろいろと 故郷を 離れ

殊更 何事 安否

了店あり 了は 殊更 一 ぬれ ぬ
すは いろいろと ぬれ ぬ
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

紅葉山 聖徳子虫



女子四季書翰文釋文

一、年賀狀

謹んで新年のお喜びを申し上げます。今日は早朝學校へ行つて拜賀の式に参列致しました。お天氣も誠にどのどか如何にも平和な新年の氣分が、學校の内外にみち／＼とあるやうに感じました。貴女は今年はいよ／＼御卒業なさるので、殊にめでたい新年をお迎へになつた事と存じます。私も恙なく年を重ねましたから御安心下さいませ。猶昨年中は何かとお導き下さいまして誠にありがたう御座いました。どうぞ今年も相變らずよろしく御願ひ申し上げます。かしこ。

二、年賀狀

年の始めの御喜び申し上げます。御両親様はじめ皆々様何のお障りもなく御年越遊ばされました事と御よろこび申し上げます。こなたも無事に年をかさねましたから御安心下さいませ。當家に参りましてから始めてのお正月でございますのに家風が違ふためいろ／＼とまごつきましたが、母上様の御指圖により失策もなく祝ひ初めも済ませました。一日迄は御來客が多くて忙しいのでそれを済ませてからゆる／＼参らせていただきます。先は年頭の御挨拶まで。かしこ。

三、かるた會に

お早々と御年賀の御言葉をいただき誠に有り難うございました。扱三日の午後一時ごろから御友達のみな様にお寄り願つて楽しく新春の一日を送りたいと存じます。御妹様御一緒に是非お出で下さいますやう。學校が休みで兄も京都から参つて居ります。歌留多なら決して負けぬと申して居ります。當日はせひ／＼御出の上日ごろの腕を御振ひ下さいますやう御待ち致して居ります。かしこ。

四、寒中見舞

随分お寒いではございませんか。何日ぞやの御便りでは雪が四五尺も積るとの事ですがそれに比べますと一尺の當地は樂な方です。然し新聞には何年目の雪だと出てゐます。當地に比べて御地はさこそとお察し申し上げます。寒さも定めてきびしい事ですが、皆様にはお變りございませんか。當地方は流石が可なりはやつてゐますが、わたしの宅では御蔭様で皆丈夫です。から御安心下さい。まだ／＼寒さも積る事ですから取りわけ御老人様や御子供さまたち御大切に遊ばしますやう皆様のお達者を祈り申し上げます。かしこ。

五、餘寒見舞

春とはほんの名のみで寒さは一層きびしい様です。みな様に

は別段お障りも御座いせんか。私方も幸ひに皆達者でございますから、御心安う思召し下さいませ。宅で手飼の白雞の卵一箱幸便に托して進呈致しましたから、お受取下さい。末筆ながら御老人様にも、精々寒さ御いとひ遊ばすやう御傳へ頼み上げます。

六、返 事

御手紙ありがたう存じました。寒さもこゝ暫くとは思ひますがお互様に堪へがたく、一日も早くやはらかな春風の音信を待ちわびます。皆様御壯健で何よりです。私方もみな無事で夫々働いてゐますから御安心下さい。お美しい雛卵ありがたく頂戴しました。書籍一部寒さお凌ぎのよすがにもと郵送致しましたから御受取り下さい。右御禮申し上げます。草々。

七、初節句を祝ふ

お庭の桃が咲きそめ春と思ふさへ何となく嬉しくなりました。お庭の桃にはことに花子ちゃんのお雛さまの事さぞかしと御察し申し上げます。今日母様が三越からともい、お雛さまを一揃ひそちらへ御届けなさいましたんですつて、其内母様と御一緒に上ります。不取敢初節句の御祝ひまで。かしこ。

八、若菜に添へて

操山をこめる霞のいろも何となう、にははしく、西野のあた

り日に長閑になつて参ります。今日うら、かな日を幸に、お母様、妹もろとも午後を西野に遊びまして、小川の根芹小さい嫁菜など摘みました。でもさすがに小川は残んの雪のとけ水でかちけるばかりの冷たさ、妹など、もうやるわと言ふのを、母と私は我慢して籠にあふれるばかりの大獲物、ほんの少しですがお母さまの御言葉で御目にかけます。かしこ。

九、かへし

雪の中をもえ出た若菜、やさしいみ手でお摘みになりましたのを勿體なういたゞきました。ほんとに山の霞野邊のほひ其物です。かしました町中においてはるの行方さへ気づかでありましたが、淡緑かぐはしい若菜を頂いて、つくづく羨しうなりました。おしついでございますが次の日曜にお邪魔いたし、お宿のはるを心ゆくばかり楽しませていたゞきたいと思ひますが、お許し下さいますか。お母様、お妹様へもよろしくお禮お傳へ下さいませとありおすお禮まで。かしこ。

一〇、行く春が惜まれて

銀の糸のやうな白い雨が、残んの花に降りそ、いで、行く春が惜しまれてなりません。讀みさしの書の上に、拙い文をしたゝめて、近況御伺ひ申し上げます。閑し故。

一一、野守する私達

下さい。楽しみにお待ちして居ります。左様なら。

一四、かへし

お言葉の通り昨日今日は釜中にある苦しさで、何も彼も忘れて失禮して居ります折から御親切なお尋ね、ほんとに有り難う存じます。楽しみ三つの上にお、なつかしい友のお便りを添へて四つと致したうございます。そのくせ私は怠つてゐるくせに——こちらでも團扇の風ばかりがたよりで、ほんの生きて居ると言ふだけのサボタージュ振り、暑い／＼を繰り返しながらも皆々恙なう暮して居ります。其内お邪魔に上らせていたゞきます。あなたもきつとね。

一五、残 暑 見 舞

朝夕はさすがに秋らしい涼しさを感じますが、晝の中はどうしてどうして土用以上の暑さで御座います。皆様もお變りはありませんか。私方ではお蔭で子供たち迄打揃つて無事ですから御安心下さい。酷しいとは申しながらも少しの間です。でも悪い病氣は却つてこれからでございます。此上とも御用心遊ばすやうくれん／＼も祈り上げます。わけてお年寄様お子様たち御大切に願ひます。先は御見舞まで。かしこ。

一六、父母の嬉しさつたる顔に

野邊一面黄金の波がたゞよふて田園によろこびの聲わくころ

山ほとゝぎす血に啼くころでも、野を守る私たちには目のまはる折で其聲を愛するなどの心も起きぬばかり、農桑大事の昨日今日、御許様にも定めし養蠶にたすきも切れるほどお働きの事と存じます。でももうあと一週間でございませぬ。四眠の少閑をぬすんで一寸御伺ひ致します。あら／＼。

一二、海水浴の勧誘を断る

葉山の海は今日もどんなにか賑つてゐる事せう。お誘ひ下さつて有り難う、飛んで行きたい思ひですけれど母がまだほんたうに癒りませんの。母は御邪魔させて頂いてもいゝと申しませうけれど何となく気が／＼です。やつぱり失禮いたしませう。看病しながら青い海を／＼に浮べてその浪間にあなたと二人で遊んでゐる自分を想像して楽しみませう。

一三、暑 中 見 舞

毎日／＼乾きにかはいた屋根瓦に白い陽のひかりがザク／＼と照りつけて私のやうな暑がりやは朝から晩まで、汗だく／＼でハア／＼とあえいでゐます。せめてもの楽しみは水を飲む事とお湯を使ふこと、夕方の散歩の三つのみです。こんな時に貴女があらしつたら、暑さも忘れられるでせうに。今日此頃どうしてあらしやるの、お母様お妹様お達者でせう。今日もね、お宅のお噂をしてやつぱり暑い／＼でお暮し遊ばしてゐるに違ひないと、皆で笑ひましたのよ。時にはお遊びにいらしつて

貴女様も美しい空気を吸って収穫の御手傳ひ遊ばしてあつしやる事と存じます。父母の嬉しさなる顔に私は幸福な働きを續けてみます。御安心下さいませ。かしこ。

一七、いひ知らぬ淋しさ

はら／＼とかせにちりしく黄の朽葉

見れば秋かも、胸のつめたき。

秋は来ぬ枯梗のつゆのさびしさも

むねにしむなりわかれある身は。

讀みかけた歌集にこんな歌が出てきました。ほんとに行く秋をいろどる紅葉にいひしらぬさびしさを覚えます。このごろを如何御暮しでいらつしやいますの。長い夜をも燈の下に親しんでお出になる御許様のおすがたが目の前にちらつきます。どうぞお體をお傷め遊ばしませぬやうに。かしこ。

一八、講習會に

あなたの好きな鈴蟲の聲が何處からか聞えて来ます。梅子様去年からの計畫だつた編物の講習會とても素晴らしい事がございますよ。あの従姉の學校の先生此秋はいよ／＼お聞き下さいますつて。絶好の機會でせう。私達もせひお仲間に入れて戴きませうね。いゝでせう。先生のお宅その他こまかいお話は日曜に伺つて申し上げます。かしこ。

一九、誕生日に招く

今年もまた紅葉の季節になりましたが、それと一緒に私の誕生日も近づいて来ました。去年はあなたは何かの御都合でお見えになりませんでしたのね。毎年きまつてお出で下さる方が御一人でもいらつしやいませんと随分淋しいものよ。明後日の夕方五時頃きつとお待ちいたしますわ。御近所の花子さんをお誘ひしていらしつて下さいね。左様なら。

二〇、轉地療養中の人より

暫く御無沙汰致しました。お便りを忘れるほど元気で晴々と暮してゐるものと思召し下さいませ。高原はもう秋でございます。今朝も散歩に出ましたら紫色の濃い枯梗が咲いて居りました。ほんたうに涼しくなつて都へ歸れます日は今只待つばかりです。かしこ。

二一、お歳暮に添へて

最早本年も僅となりました。日ごろは不沙汰ばかり致して何とも申譯ございませぬ。この菓子折は誠にお粗末ではございませぬが、御歳暮のしるしとして差上げます。どうぞ御納め下さいませ。何れ新年にはゆつくりと御伺ひいたします。あら／＼。

二二、返事

お言葉の通り新年も近づきまして、さぞ御多忙の事と存じます。お見事な御歳暮有り難く御禮申上げます。就ては輕少なこの一宮の蜜柑、御かへしの印までに使に持たせましたから、御笑納下さいませ。御繁忙中御挨拶には及びませぬ。何れ春水にゆる／＼お目にかゝりお断承りたいと存じます。

二三、父の許に送る

其後も御機嫌よう入らせられ何よりお嬉しう存じ上げます。私共も皆々無事に過して居ります故御心安う思召し下さいませ。本日別便にて小包一個お送り申上げました。お父様お好きの謡曲の一節を紹刺しにいたしました。お紙入れで御座います。が隙々に三ヶ月ばかりかゝつてやつと出来上りました。不出来でございますけれど御笑納下さいませ。先は一筆御案内まで。お體を御大切に願ひます。かしこ。

二四、還曆を祝ふ

其後は御不沙汰申上げて居ります。承りますればこの十日、御伯母様には還曆のお祝ひを遊ばすさうでお目出度う存じます。この上ともいよ／＼御丈夫に御元氣で萬壽も米壽も御すこやかにお迎へになります様祈り上げます。別封小包の座蒲團はお年の數の六十一人のお友達から集めましたものでございませぬ。志だけ御受納下さいませ。かしこ。

二五、急病を知らず

お驚かし申上げるのは、本意ではございませぬが一筆御知らせ申上げます。露子様一昨夜から少しお熱がありお休み遊ばしてゐらつしやいましたが醫師も感胃らしいと申されますのでさしたる心配もないと存じて居りました處今朝から俄に甚だしい御發熱只今三十九度を越して居ります。兎に角どなた様か至急御出で下さい。急ぎ御知らせ致します。かしこ。

二六、全快を祝ふ

昨冬以来の御病氣一時は中々お重ういらつしたらしう拜しました。お母上様の行届いた御看護と、あなた様の御誕生とで、だん／＼御快方とのお手紙を頂きまして喜んで居りましたが今日の御文によれば早お庭先を御散歩が出来ますとや、何といふよろこばしい事でございます。定めし櫻匂ふ頃にはすつかり御全快遊ばして花見のお伴を願はれませうかと、心強う存じ上げます。先づそれまではお氣をつけ遊ばして下さいませやう申し進め参らせませぬ。草々。

二七、返し

お情こもる御玉章、繰り返し拜見致しました。ほんとにあの重態自分ながら此世に生きる望は絶えはて、暗いこゝろを續けました。今更によくも治つたものだ、不思議なくらゐでござ

います。これと申すも主治醫のお骨折と、母が命がけの看病と、皆様たちのお心盡しの三つのお蔭と、たゞ／＼感涙にむせんでゐます。わけて貴女様にはいろ／＼御心配をかけまして厚いお世話になりました。何れ御目にかゝつて病中の感想を聞いていただく筈で御座いますが、不取敢御禮まで。かしこ。

二八、轉地療養見舞

秋子様、其後は心ならずも御無沙汰して濟ません、轉地御養生の効が見えて、日に／＼およろしい事とは存じますが御生活の御模様などお知らせ下さいませんか。御地は温泉のみか山水の景もよろしく、空氣療養にも好いとのこと、お家などはすっかり御忘れになつて御心靜かに御病氣の根を絶たれますやう祈り上げます。本日郵船で鮎少々お送り致しましたからお召し上り下さいませ。何か相應の御用も御座いましたらどうぞ御遠慮なく御申越し下さいませ。先は御見舞まで。かしこ。

二九、返事

冬子様、御親切な御手紙下さいまして、ほんとに有りがたう存じます。お恵みの御品只今拜受、これもあつく御禮申上げます。御心配下さつた病氣は、御蔭様で、めつきりよくなりました。此分ならばもう二週間もすれば歸られようかと存じます。御安心下さい。當地は山間の僻地でお客も少なく、靜寂そのもので何だか別天地の感じが致します。どうか皆様へよろしくお

傳へ下さいませ。不取敢御禮申上げます。かしこ。

三〇、類焼見舞

昨夜は御近所の失火から、とう／＼御類焼のよし、何とも申上げやうなき次第でございます。皆様お怪我もなく、お土蔵は無事と承り、せめてもの御幸福と存じ上げます。さし當つてのお見舞として握り飯と梅干、召使に持たせませ。何か御不自由のものが御座いましたら御遠慮なく御申付け下さい。尙召使は序に御止め下さいましてお使ひ下さいませ。何れのち程主人が御見舞に参る筈でございます。

三一、返事

この度の災難につきましては、早速お手厚いお尋ねをいただき、その上調法なお品を御恵み下さいまして有り難う存じます。一時はどうしたらいいかと途方に暮れましたが、日頃懇意に願つてゐる方の御同情でお離れ座敷を借りまして、最前それに引移りました。みな／＼に怪我がありませんのと、土蔵の残りもしたとは不幸中の幸でございます。取込中失禮ですが書面で御禮申上げます。お言葉にあまへお召使の方を今晚まで拜借いたします。あら／＼かしこ。

三二、貸家の有無を照會

御無沙汰致しました。皆様お變りはありませんか。現誠にお

面倒な御願ひで恐れ入りますが、お宅附近に似合の貸家はないでせうか。子供達の健康のため、空氣のいい、そして靜かな場所に轉じたいと存じ、お宅の附近に見當をつけたのです。四間か五間で少しの庭も欲しく、日當がよくて、成るべくは門構へ、それで家賃は四十圓内外が希望です。主人が二三日中に何ふと申してゐますが、前以て何處か當つて見て下さいませんか。なるべく本月末を境としたい望みます。勝手ばかりお願ひ致して相濟ませんが、何分御願ひいたします。

三三、返事

お子さん達のための御轉宅ですつて、どの方がお弱いんですか。家はいくらでも有ります。宅の近くにはほはお望みに近いのがあります。間は六つ、門がまへで、庭は六十坪もあるでせう。つい先日まで或會社の重役の方が居られましたのですが、此度御轉任で、今丁度空いてゐます。家賃は五拾圓との事ですが、五圓位は値切れるかと存じます。その外にも、二三あります。とに角、至急お遊びかた／＼お出かけ下さい。御案内致します。

三四、水害見舞

唯今ラヂオのニュースにて御地の水害を聞き驚き入りしました。夕刊の詳報を待つ間もどかしくとりあへず御様子を御伺ひ申上げますがどうぞ皆様にお障りなきやうにと神かけて念じ

居ります。川近きお住居の事として一しは案じられ家内一同胸をいためて居ります。お取込みの中にお惣菜の足しにもと焼海苔一罐御送り申上げます。御笑味下さいませ。

三五、暴風見舞

唯今朝刊を見て御地の暴風に驚きました。嘸母上様にはお困りの御事だつたらうと御察し申上げます。主人より早速打電致しましたが重ねてお見舞申上げます。毎年二八月の常にて多少の嵐はまぬがれないものではございますが故郷を離れて居りましては殊更に家が案じられてなりません。どうぞ何事も在さぬやうにと念じ上げつゝ、取急ぎ御安否伺ひ上げます。あら／＼かしこ。

巻紙

御良人様にはこの度めでたく御凱旋いよ／＼明日は御歸宅のよしことに御名譽の金鷄勳章さへ御下賜の榮を得させられ候御事萬代つきせぬ御家の光りと御祝ひ申し上げ候御刻限には主人こと停車場へ御出迎へいたす筈に候へどもとりあへず私よりもひとこと御よろこび聞え上げ置き候。

四月八日

松山 美代子

梅田はな子様

御もとに

(終り)

381
114

所賣發	發行所	製印	印刷者	發行所	著者	有所權版
東京市神田區淡路町	東京市神田區神保町	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	山野紅蘭	昭和十三年四月十五日印刷
東京市神田區橋區銀座	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	志水松太郎	昭和十三年四月二十日發行
東京市神田區橋區大北	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	島田一〇八	書道實習講座(第一回紀念)
東京市神田區淡路町	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	共同印刷株式會社	女子四季書翰文(2冊の中)
東京市神田區淡路町	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	峯文莊特設部	
東京市神田區淡路町	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	峯文莊	
東京市神田區淡路町	東京市神田區九段	東京市小石川區久堅町	東京市小石川區久堅町	東京市神田區猿樂町	峯文莊	

終